

独白の呪い，対話の癒し

——『楽園喪失』第X巻，720-1104行を読む——

西 川 健 誠

*The characters of Paradise Lost
do not soliloquize until they have
fallen [.]——John Broadbent⁽¹⁾*

要 旨

「独白」の対概念は「対話」であろう。他者の存在を前提としない「独白」はその主を精神の自家中毒状態に至らしめる禍機となり得る。対するに「独白」は，まさしく他者の存在を前提とし，その存在との関わりあいを意味するゆえ，閉じられていた精神を開く好機となり得る。

このような「対話」による精神の再生の文学的な表現の例として，本論ではミルトン『楽園喪失』第X巻，720-1104行目，アダムの独白と，それに続くかれとイブとの対話を取りあげる。独白特有のナルシシズムに陥りかかっていたアダムが，イブという他者とその他者との対話により，魂の健康を取り戻していくプロセスを検討してみたい。

I

ミルトン『楽園喪失』中には，たがいに対をなすパッセージがいくつかあるが，中でも特に類似が目立つのは第四巻冒頭 [IV, 32-113] と第十巻の後半 [X, 720-844] であろう。前者はサタンの，後者はアダムの，長い独白を含む。両者とも神の禁を犯して罰され，絶望を経験した。両者の「衷なる地獄」('the hell within' [IV, 20]) における呻吟がその長い独白の形で表現されている。

だが同じ「衷なる地獄」を経験しながら，サタンとアダムの精神は独白の後大きく違った方向に進む。サタンはいわば「独白のナルシシズム」と呼べよう精神の自家中毒状態からついに脱することが出来ず，他者に対して悪意を抱くことになる。対するにアダムは，「独白のナルシシズム」に禍いされながらも最終的にはそこから脱することが出来た。では何が両者の明暗を分けたのか。

この問いに対する一つの答えとして，独白に対する対話，および対話相手の存在，を考えてみたい。和解を求めるイブの姿に「武装を解かれた」('one disarmed' [X, 945]) アダムは，彼女との対話を通じ次第に頑なさを解かれていく。これがアダムの「衷なる地獄」からの生還を可能にした，と思われるからである。

そこで本小論では，アダムとサタンの陥った心理の類似を両者の言葉遣いの類似から指摘した上で，イブという他者との対話がいかにアダムを癒したかを検討してみたい。そこここにサタンの言葉をこだまさせていたアダムは，どのようにそのこだまの影響下から脱し，まずはイブに，最終的には

神に、魂を開くに至ったのか。以下ではそのプロセスを「対話」の中に探ることにする。

II

失楽後のアダムがナイファティーズ山上のサタン同様、乱れに乱れた思いでいたことは、語り手の「荒れる情念の海に翻弄されて」('in a troubled sea of passion tossed' [X,718]) という形容からも確認出来る。まずはそのかれの嘆きの冒頭から見てみよう。

O miserable of happy! Is this the end
Of this new glorious world, and me so late
The glory of that glory, who now become
Accurst of blessed, hide me from the face
Of God, whom to behold was then my highth
Of happiness[?]

(ああ、幸福から悲惨への何という転落！これが
あの栄光にみちた世界の、そしてつい先来まで、
その栄光の内の栄光であったこの私の末路か。
祝福された身から呪われた身に転落し、かつては
お目にかかるのが最高の喜びであった神の御顔から
身を隠すものとなるとは)

[720-725]

「Y から X へ」(X of Y) という言葉の組合せ ('miserable of happy' [720], 'Accurst of blessed' [723]) が、アダムの境遇の変化を僅かな語数の内に伝えていて巧みだ。「幸なくして幸ありし日をしのぶよりなほ大いなる苦患なし」というダンテ『神曲』(地獄篇第5曲, 121行目)の言葉が思い出されよう⁽²⁾。加えて「これが……の結末か」('Is this the end...?') という言い方には

'[Is] this the seat
That we must change for heaven, this mournful gloom
For that celestial light?'

(これが、私たちが天国と
引き換えるべき住み家であるとは。この陰気な闇を
天の光明と引き換えなければならぬとは)

[I, 243-245]

という地獄におけるサタンの言葉の反響が聞き取れる。アダムとサタンとの境遇の類似が、さっそく言葉の上でも浮き彫りにされているのである。

楽園を喪失したことにもましてアダムの心を苛むのは、罪とその呪いの伝播である。原罪の罰は独

りアダムのの上のみに止まらず全人類にまで及ぶ、というのが神の子の裁定であった。その点でアダムの苦悩はサタンにまさる。とすればかれが「産めよ、殖えよ」という失楽前の神の言葉を恨み [X, 729-731], 子孫たちの転落の呪いがことごとく己れに逆流することに慄いて,

[A]I from me

Shall with a fierce reflux on me redound,
On me as on their natural center light
Heavy[.]

(私から生じたすべて [の罰] が
激しく逆流してこの私にはねかえってくる。
あたかもこの私が、引力の法則上当然の
中心であるかのように) [738-741]

と呻くのも当然だろう。とはいえ「衷なる地獄」を抱えたサタン同様、この場面におけるアダムの、過度に自我へ傾斜する傾向が認められないか。「私から」('from me') とか「私の上に」('on me') のような、「私」という言葉の頻発はその一つの証しである。また引力の法則を持ち出し自らを「(呪いを引き付ける) 当然の中心」('their natural center') と称しているのも——たとえそれが自責の念の表明にせよ——無意識の内の自己中心性の現われかもしれない⁽³⁾。

「衷なる地獄」を抱えたサタンは、自分が位ある天使として創造られたことを自らの転落の原因として呪った[IV, 58-61]。同様に転落したアダムの、自分が神によって創造されて楽園に置かれたことを怨んで

*Did I request thee, Maker, from my clay
To mold me man, did I solicit thee
From darkness to promote me, or here place
In this delicious garden?*

(創造主よ、私はあなたに土から
私を人間として作ってくれと頼んだでしょうか
暗闇から引き出してくれ、この美しい楽園に置いてくれ、と
頼んだでしょうか) [X, 743-746, 強調は西川]

と神を難ずる。「私はあなたに……したでしょうか」という疑問文の繰返しからは、旧約聖書中のヨブ(例えば同3章)のそれにも似た苦悩が伝わってこよう。いや、罪に対する罰がかれ一人にとどまらず子々孫々まで及ぶことを考えれば、アダムの苦悩はヨブのそれにまさるとも劣るまい。事実、アダムはヨブ同様「あなたの裁きはわかりかねます」('Inexplicable/ Thy justice seems' [754-755]) と

神に対し怨み言を言っている。

だがその一方アダムは、自ら自分の怨み言が的外れであると認めている。恵みを享受した後に不満を漏らすのは我が儘というものだし [758-759]、好きで神に創造られたわけではないという主張は「何故親父はおれを産んだ」という子供の言い分同様傲慢な言掛りに過ぎぬ [759-764]。そう考えた末

Be it so, for I submit, his doom is fair,
That dust I am, and shall to dust return.
(そうであっても、認めざるをえない。あの方の裁きは正しく、
塵であるこの私が、塵に帰るのが、正当であることを) [769-770]

と、神の義を認めるアダムの姿は健気だ。倫理的な判断において、アダムは決して自らの主観に没入しきったわけではないのである。

とはいえ神の側に正義を認めたからといって、アダムは心の平安を得るわけではない。逆に苦悩は深まるのみだ。新たにかれを苛むのは「死なき苦痛」('deathless pain' [775]), つまり「死」が遅延され絶望の状態が引き延ばされることである。その点から見ると

Why do I overlive,
Why am I mocked with death, and lengthened out
To deathless pain?
(なぜ私は生命を引き延ばされるのか。
なぜ私は死に弄ばれ、死なき苦痛を身に受けるべく
死を引き延ばされるのか) [773-775, 強調は西川]

という疑問文の反復、あるいは775-778行目にかけての

How gladly would I meet
Mortality my sentence, and be earth
Insensible, how glad would lay me down
As in my mother's lap?
(どれほど喜ばしくわが裁きである死を
迎え、何も感じない土塊になりたいことか。
母の膝に抱かれるかのごとく死の眠りにつくことが
どれほど喜ばしく思われることか) [775-778, 強調は西川]

という感嘆文の反復は印象的だ。「神よ、なぜ私を創造ったのですか」[743-746]という箇所同様、ヨブ記を思わせる激しさがある。行間から響いてくるのは神とその定めを糾弾せんばかりの、尖鋭な苛立ちだ。

苛立ちの激しさに比例してアダムの議論は晦渋の度を増していく。曰く、肉体はともかく靈魂は死を免れてしまうのではないか、否、靈魂こそが罪を犯した以上、靈魂にも死が訪れるだろう[782-793]。曰く、神は有限の人間に、終りなき死という無限の刑罰を与えるのか、否、それは神には有りえない矛盾だ[794-808]。だが「死」はそもそも一撃で人間の感覚を奪うのではなく、終りなき悲惨('endless misery' [810])の謂ではないか[808-811]、云々。こうした錯綜した思考の末にアダムが帰着するのは結局、死の遅延、或いは「死なき死」('deathless death' [798])への恐怖だ。「死」と自分とは一体、というかれの告白は痛切である。

[A]ly me, that fear

Comes thundering back with dreadful revolution

On my defenceless head; both death and I

Am found eternal, and incorporate both[.]

(ああ、その恐怖が

恐ろしく回転しながら、怒号のように撥ね返ってきて、

無防備な私を直撃する。死も私も永久のもので、

一体なのだ)

[813-816]

ここには「わたし自身が地獄なのだ」('Myself am Hell' [IV, 75])というサタンの言葉の反響が聞き取れる。サタン同様、アダムにとっても自らが即「死」であり、「死」と不可分、というわけである。'[B]oth death and I/Am found eternal' (強調は西川)と、動詞を複数形('are')ではなく単数形('am')にしてある所も巧みだ。「死」と「わたし」の一体性(cf. 'incorporate')が、文法上も確認されている。

かくして自らを「死」と同定したアダムの嘆きは、結局振り出しに戻ってしまう。何故一人の罪ゆえに全人類が罰されなければいけないのか[X, 822-824]とか、残すのが罪の伝播という遺産であるならばいっそ浪費してしまいたい[819-822]、というかれの訴えは切実であるけれど、かれの思考は堂々巡りするばかりである。加えていえば、嘆きの中に皮肉混じりの自己憐憫が混ざっている⁽⁴⁾。結局自ら形容している通りの「迷路の如き」('through mazes' [831])自問自答の末にアダムが再度到達するのは

Him after all disputes

Forced I absolve[.]

(どう詮索してみても

あの方の無罪を宣言せざるを得ない)

[828-829]

という結論だ。「汝こそ呪われよ、汝の自由意思が神の意思に叛いたから、正しくも今の苦しみがあるのだ」('Nay, cursed be thou; since against his thy will/Chose freely what it now so justly rues' [IV, 71-72]) というサタンの言葉と軌を一にした、自らへの有罪判決、神への無罪判決である。「…せざるをえない」('forced') という一語に、いかにもアダムの苦渋があらわれている。

神に対して無罪判決を下したサタンは一段と深い苦悩に陥った。同様にアダムも底なしの「哀なる地獄」に陥る。アダムの嘆きの至る所に、サタンの嘆きが反響している。

Thus what thou desirest

And what thou fear'st, alike destroys all hope

Of refuge, and concludes thee miserable

Beyond all past example and future,

To Satan only like both crime and doom.

O conscience! into what abyss of fears

And horrors hast thou driven me; out of which

I find no way, from deep to deeper plunged!

(かくしてお前の望むところも

恐れるところも等しく、この苦難から逃れる希望を全て

砕き、お前を、前代未聞なほどあわれな者、

犯した罪においても下された罰の点においても、

仲間はただサタン一人のみ、と宣告するのだ。

ああ、わが良心よ、なんと怖く恐ろしい深淵に

お前は私を投げ込むことか。その深淵から逃れる道を知らず、

私は深く、さらに深く転落するのみ)

[X, 837-844]

サタンの絶望に劣らぬ深い絶望をアダムが抱えていることが、両者の言葉のこだまから伝わってくる。例えば '[concludes] thee miserable' (「わたしを惨めだ [と結論する]」 [839]) という部分は、

Me miserable!

[IV, 73]

(ああ惨めな私)

というサタンの叫びを思い出させるし、 'destroys all hope' (「[わが願いもわが恐れも等しく、罰から逃れる] 全ての希望を砕く」 [X, 838] という句には、

All hope excluded thus
(希望は全て排除され)

[IV,105]

という言葉の反響を、或いは 'from deep to deeper plunged' (「深みからさらなる深みに沈むばかり」
[X, 844]) という句には

And in the lowest deep a lower deep
Still threatening to devour me opens wide
(しかも深淵の底にはさらなる深淵が、
私を貪り食おうとして口を開いている)

[IV,76-77]

という言葉のエコーを聞き取れる。かくして「罪においても罰においても相似るはサタンのみ」
('To Satan only like both crime and doom' [X,841]) という心情が、言葉の上でも証されている。

しかしである。自らの状態をこのようにサタンのそれに言葉遣いの上で反響させることで、アダムはかえって自らの精神を閉じている所がある。「(わが願う所も恐れる所も等しく) 全ての希望を砕く」とかれは言う。だが希望は「全て」('all') 砕かれたといえるのか。また「お前は惨めと結論される」というが、これが本当にかれの最終的「結論」('conclusion') なのか。アダムが躰いたのは禁断の木の実を食ったイブを見た瞬間に「万策つきたような状況」('what seemed remediless'[IX, 919]) と即決してしまったため、とは S・フィッシュの指摘であるが⁽⁵⁾、かれは同じ間違いをここで再度犯しているように思われる。自分で自分に「神は自分を赦さない」という、即決判決 (summary justice) を下してしまっているのだ。そして「判決を下す」ということについていえば、自分に下された罰の正しさを認めて述べるかれの言葉も気にかかる。アダムは

Him after all disputes

Forced I absolve [.]

(どう詮索してみても

あの方の無罪を宣言せざるを得ない) [X,828-829, 強調は西川]

と述べているが、この場面におけるアダムの地位は、少なくとも語り手から見れば「被告」であって「判事」ではない筈である。「判事」役を演じたのは神の御子だ。とすればアダムが「無罪を宣言する」('absolve') という本来「判事」が使うのに相応しい言葉を――たとえ自らの非を認める、という文脈であれ――「被告」の身でありながら用いるのはおかしい。それは少なくとも、用語の倒錯というものであろう。

アダムの絶望は痛ましい。だがその痛ましさは認めつつも、読者としては、アダムの独白の中に丁度サタンの独白の中に感じたのと同種の egotism を感じてしまう。専ら自分の内側にのみ視線が向

き、中心を外に求めようとしない閉ざされた精神のあり方、いわば「自我への屈曲」が認められるからである⁽⁶⁾。サタンが魂の眼差しを外部に向かって閉ざしてしまったのと同様、アダムも魂の閉鎖状態、「独白のナルシズム」に嵌まってしまっているのである。

しかしサタンとは異なって、アダムの精神は閉じられたままにはならず済む。ではかれの「独白のナルシズム」がイブとの対話により解毒されていくプロセスを、次節で追ってみよう。

III

「独白のナルシズム」に陥ったサタンは、他者を拒絶・憎悪するに至った。同種の心理状態にアダムも陥ったのは前節でみた通りだが、かれもまた他者を拒絶、憎悪するのか。

独白直後のかれの動作や言動を見る限り、残念ながらそのようだ。かれを慰めようとして近づくイブに、アダムがまず見せる動作は

Her with stern regard he thus repelled.

(厳しい眼差しでかれは彼女を斥けた)

[866]

というものであるし、口にするのも

Out of my sight, thou serpent, that name best

Befits thee with him leagued, thy self as false

And hateful[.]

(失せろ、蛇め、奴と徒党を組んだお前は

蛇と呼ばれるのが相応しい。蛇に負けず劣らず陰険で

憎むべき存在なのだから)

[867-869]

という言葉だからである。これが露骨な拒絶でなくて何であろう。イブへの愛ゆえに禁断の実を食らったとはいえ、アダムの口調は余りに口汚ない。同じ口汚さは、失楽の責任をイブに負わそうとする一文、すなわち

But for thee

I had persisted happy, had not thy pride

And wandering vanity, when least was safe,

Rejected my forewarning, and disdained

Not to be trusted, longing to be seen

Though by the devil himself...

(お前さえいなければ

私は幸せなままでいられたのだ。全然安全ではなかったのに
 お前が驕りと虚栄心にかられて、私の警告を斥け
 一人では危なかりう、という懸念を不快に思い
 相手がまさしく悪魔であるのに、見つめられることを願って、
 彷徨い出ていくことがなかったならば……) [873-878]

という、仮定法過去完了ではじまる一文にも聞き取れる。実はこの一文、仮定法に加えて多数の挿入句が割り込み、結局延々16行の長さのセンテンスになっている。イブを呪うアダムの未練がましさが文構造にまで反映されている、といったら言い過ぎであろうか。

同種の未練がましさをさらに読者に感じさせるのは、すぐ後に続くかれの女性蔑視的発言だ。イブの創造を神に乞うたのは他ならぬ自分であったことを忘れたかのように、アダムはイブを呪って

all but a rib
 Crooked by nature
 (生まれつき
 曲がった肋骨も同然) [884-885]

と言い放ち

this fair defect
 Of nature
 (見かけだけは美しい
 自然界の瑕疵) [891-892]

という暴言を投げつけ、ついでに結婚についても

strait conjunction
 (窮屈な結合) [898]

と形容した上で長々と憎まれ口をきいている [895-908]。一見気が利いているだけに悪質な言葉であろう⁽⁷⁾。こういう「利いた口」から伝わってくる機知は、相手の侮辱を目的とした劣化した機知にすぎない(侮辱ということを問題にするならば、これらの言葉はイブのみならずイブを創造した神をも侮辱していよう)。しかも計42行にわたる八つ当たりの間、アダムは一度たりともイブを名前で呼んでいない。これもかれがイブを「相応しい扶手」('fit help' [VIII,450])とは見ず、「かの悪しき女性」('that bad woman' [X,837])としか見ていない証といえる。

こういうアダムの頑なさを考えると、イブの対応はいじらしいばかりだ。夫の方が散々悪態をついた末横を向いてしまう（‘He added not, and from her turned’ [909]）にもかかわらず、彼女は「滅いらずに」（‘Not so repulsed’ [910]）和解を求めているからである。まず「そんな風に私をお見捨てにならないで下さい」（‘Forsake me not thus, Adam’ [914]）と呼び掛けた彼女は

[T]hy suppliant

I beg, and clasp thy knees[.]

（あなたに嘆願する者として

私は乞い願い、あなたのお膝を離しませぬ） [917-918]

と言ってアダムの赦しを乞い、次いで

[F]orlorn of thee

Whither shall I betake me, where subsist?

（あなたに見捨てられたなら

私はどこに身を寄せ何を頼りにすればよいのです） [921-922]

とかれに問う。修辞疑問文の中に、また「（あなたのお膝を）離しませぬ」（‘clasp’）という単語の中に、聞き取れる彼女のしおらしさは、アダムの頑なさとは対照的だ。また神学的にみてもここではイブがアダムより鋭敏である。それは例えば

[Between us two let there be] one enmity

Against a foe by doom express assigned us,

That cruel serpent [.]

（せめて私たち二人の間では、裁きによりはっきりと

私たちに示された敵、あの冷酷な蛇にたいして

団結しようではありませんか） [925—927]

という言葉から察されよう。神の御子が蛇に対して下した「お前と女の間に敵意を置く」[cf. X, 179-180] という予言を、アダムは忘れているのに、イブは思い出しているのだ。そして何より、イブがアダムの罰まで背負うことを申し出ているのは見落とせない。現に

[T]hat all

The sentence from thy head removed may light

On me, sole cause to thee of all this woe,

Me me only just object of his ire [.]

(あなたの頭から罰が全て取り除かれて
あなたにとり全ての禍いの源であるこの私、
あなたの怒りの正当な対象であるこの私の上のみに
神の怒りが下りますよう)

[933-936]

という祈願で彼女は言葉を結んでいるのである。me という単語の繰返しの中に、アダムのそれ [738-741] と同様、過剰な自意識を見逃すことは出来まい。だが、絶望の complaints の中で口にされたアダムの「私に、私に」の中には認め難かった犠牲的精神、ちょうど詩篇第51篇をはじめとする「悔改めの詩篇」を思わせる精神も、ここには確かに認められる。さらにいえば、神の子が父なる神を前に人間の身代りになることを申し出た言葉 ('Behold me then, me for him, life for life/I offer, on me let thine anger fall' [III, 236-237]) との共鳴さえ、聞き取ることが可能かもしれない⁽⁸⁾。

イブの言葉はいじらしい。だが言葉の上のいじらしさに加えて、彼女の所作のいじらしさに注目したく思う。なぜならそれこそが結局、アダムの頑なさを解くことになるからだ。新約聖書中、罪ある女性がイエスに近づき、かれの足を涙で濡らして、それを自分の髪で拭う、という記事があるが(ルカ伝7章37-38節)、この場面のイブも

with tears ceased not flowing

And tresses all disordered

(涙は流れやまず

髪はすべて振り乱して)

[X, 910-911]

という姿で、アダムの足元で赦しを乞うているのである⁽⁹⁾。どちらの所作にも自らの罪に対する深い痛恨の念から発した激しさが、いささかの艶めかしさを感じさせる程だ。だがこのイブの所作の激しさ、艶めかしさこそが、閉ざされていたアダムを動かすのである。すなわち

[H]er lowly plight

Immovable till peace obtained from fault

Acknowledged and deplored, in Adam wrought

Commiseration

(罪を認め、嘆いた上での

和解が得られるまで、その場を動くまいと誓ったイブの

へり下った姿が、心を動かされずにいたアダムの中に

同情心を引き起こした)

[937-940]

とある通りだ。かれの心は和らぎ ('[H]is heart relented' [942]), いわば「武装を解かれた者」 ('one disarmed' [945]) となった, とともに記されている。アダムの失楽の原因は「愚かにも女の魅力に屈したため」 ('fondly overcome with female charm' [IX, 999]) と評されるが, この場面におけるアダムの所詮「女の魅力に屈して」いるのかもしれない。だがまさしくその「女の魅力」によって, かれが精神の健康を取り戻し始めているのも確かだ。これでは余りに下世話で男性の欲望を安易に追認した物言いだ, というのならば, アダム——そしてかれを始祖とする人類——の再生は, イブの全身全霊の謝罪により開かれた, と言い換えてもよい。このようなイブの所作の救済史上の意味を認めて, 旧岩波文庫版『楽園喪失』の訳者, 藤井武は「人類復興の兆し。叛きも女性より, 和ぎも亦女性より」という評釈を残しているが, 適切な評といえよう⁽¹⁰⁾。

もっとも心を開き始めたとはいえ, イブに対するアダムの態度にはぎこちなさが残る。例えば

Unwary, and too desirous, as before

(相変わらず見境なく, 望むところだけは大きい[お前]) [X, 947]

あるいは

Bear thine own [punishment] first, ill able to sustain

His full wrath whose thou feel'st as yet least part,

And my displeasure bear'st so ill.

(罰を背負うのはまず自分の分のみにせよ。お前は神の怒りの

まだほんの一部分しか感じてなく, 全部となれば背負いきれぬ。

だいたい私の不興にすらよく耐えられぬのだから) [950-952]

という言い方には, いささかの棘が感じられなくもない。とはいえイブに対するアダムの敵意が基本的には解除されたことは

But rise, let us no more contend, nor blame

Each other, blamed enough elsewhere, but strive

In offices of love, how we may lighten

Each other's burden in our share of woe [.]

(さあ立とう, 互いに言い争うことも, 責めあうことも

やめよう。もう余所で十分に責められたのだから。かわりに

愛の務めにはげもう。共に苦境にある中で, どうしたら

互いの重荷を軽く出来るかを考えるのだ) [958-961]

という言葉から察されよう。自らの前に伏すイブに「立つ」よう促し ('rise'), 相互の和解 ('let us no more contend, nor blame/Each other') を申し出て、互いの重荷を背負いあう ('how we may lighten our share of woe') よう提案するかれの精神は、イブに対して確かに開かれ始めている。'I' (私) という代名詞にかわり 'we' (私たち) が多用されている [958, 959, 961] のもその証である。そして何より「愛」という言葉がはっきり登場している ('in offices of love' [強調は西川]) ことが、失楽と同時に失せていた二人の愛の復活を告げている。「失楽後の世界においてまず回復されたのは夫婦愛である」とはD・マコリーの指摘だが、これは的を得ている⁽¹¹⁾。

かくして両者の心は互いに開かれた。さりとて二人とも完全な心の平安に到達したとはいえない。アダムは再度死の遅延を怨む ('a slow-paced evil' [964]), 自らの罪の禍いが「子孫まで播わる」 (to our seed...derived' [965]) ことを嘆いているし、他方これを耳にしたイブも

Childless thou art, childless remain

(子供がいらない以上、子供がいらないままです) [989]

と、子孫を残さぬことを、そしてそのために夫婦の交わりを放棄しなければいけないのが辛ければいっそ自殺すること、つまり

Destruction with destruction to destroy

[1006]

(破滅を破滅でもって破滅するのです)

と提案する始末である。イブの言葉の一方は「汝埃なれば埃に戻るべし」という裁きの言葉 [X, 208] を意識した、また他方は「死を死でもって死に至らしめる」という逆説を含んだ、いずれも気の利いた表現である。だがアダムの吐いた「利いた口」にも似て、彼女の提案はどちらも生の否定であり、そこから伝わってくるのは純粋な機知より精神の焦燥だろう。そもそもイブ自らが心中の不安を認めているし ('my unquiet breast' [975]), また語り手も彼女の心理を「激しい絶望」 ('vehement despair' [1007]) と評している。

となれば今度はアダムがイブの絶望を癒す番になろう。かれはもう頭ごなしに彼女の早急さを非難することはせず、まずイブのことを名前と呼んでいる ('Eve' [1013])。次いで彼女の中にある美質と呼ぶものを「そなたが蔑む生命や、快樂よりも崇高で気高い何か」 ('something more sublime/And excellent than what thy mind contemns' [1014-1015]) という言葉で認める。その上で自殺はかえって生命と快樂への執着を意味し [1016-1019], 神の裁きに逆らう以上一層の罰を受けるだろう、とイブを諭す [1020-1028]。その口調に棘は最早ない。続けて

[L] et us seek

Some safer resolution...calling to mind with heed

Part of our sentence, that thy seed shall bruise
The serpent's head [.]

(より安全な解決を
求めようではないか…汝の裔が蛇の頭を砕く、という
私たちに下された裁きを注意深く
思い出しつつ)

[1028-1029, 1030-32]

と、「汝の裔は蛇の頭を砕く」という御子の予言にイブの注意を向けさせ、かつ

piteous amends, unless
Be meant. whom I conjecture, our grand foe
Satan[.]

(その蛇というのが、
推測するに、私たちの大敵サタンでなければ、
意味のある報復とはいえない)

[1032-34]

と、「蛇」とはサタンのことであると特定して、サタンへの復讐の実現のためにも、不産や自殺という選択肢を放棄するよう説得している [1028-1040]。まずはイブが思い起こした [cf. 925-927] 福音のいわば前知らせの予言を、ここではアダムの方が掬いあげ、解釈を深めた上で彼女に再提示する、という組立てになっているのは興味深い。サタンが独白の末、思考の袋小路に入っていたのとは対照的に、アダムとイブは対話を通じて、希望に向い相互を啓蒙している。対話が一種、二人の間の「カテキズム」^二の教理問答の役割を果たしていて、それが二人にとっての精神的突破口になっているといってもよいだろう。

こうしてイブとの対話を経るうちに、アダムは神学的鋭敏さを回復したようである。自殺という選択が「神とその正しき軛に対する抵抗」('reluctance against God and his just yoke' [1045]) だと諫めた上で、かれは

Remember with what mild
And *gracious* temper he both heard and judged
Without wrath or reviling [.]

(あの方が怒ることも罵ることもなく
どれほど穏やかに優しくわたし達の言い分に耳を傾けた上
裁きを下されたか、思い出すがよい)

[1046-48, 強調は西川]

とイブに促している [1046-48]。この神の「優しさ」＝「恵み」(gracious<grace) への言及から、

アダムが、正義の神が同時に愛の神であることを認めているのがわかる。同様の神の愛への感覚は

[H]is timely care
 Hath unbesought *provided*, and his hands
 Clothed us unworthy, pitying while he judged.
 (時を得たあの方の配慮が求める先に与えられ、
 あのお方の御手は、裁きつつも憐れみ、かたじけなくも
 私たちに着物を着せてくれた) [1057-1059, 強調は西川]

という言葉からも窺えよう。「裁きつつも憐れみ」獣の皮を二人に着せた神の子の行為に、アダムは神の配慮 (provision) — ひいて言えば「摂理」(Providence) — を読み取っているのだ。そのかれにとり、死の遅延は最早呪われることではなくなり、これから先の生への展望を持つことも不可能でなくなったのだろう。だからこそ

we need not fear
 To pass commodiously this life, sustained
 By him with many comforts [.]
 (無事にこの地での
 生を過ごしていくのに、不安はない。あの方が支え
 数々の慰めを与えてくれる限り) [1082-1084, 強調は西川]

という、摂理への信頼の言葉も出て来るといえる。

アダムがイブを諭す言葉の結びは、信仰告白の響きをおびている。かれはイブに言う。二人そろって罪を告白し神の赦しを乞うならば

Undoubtedly he will relent and turn
 From his displeasure [.]
 (疑いなく神は憐れみになって、不興
 から顔を転じられるであろう) [1093-1094, 強調は西川]

と。「疑いなく」('Undoubtedly') という一語がかれの信仰の表明になっている。すぐ続けて、怒った時の神の顔に見えたのも「好意と恩恵と慈悲の輝き」('favour, grace, and mercy shone' [1096]) のみだった、と言い切っている。イブという他者により癒されたアダムは、神という絶対他者への信を取り戻しているのだ。そのかれがイブ共々、

[T]hey forthwith to the place
 Repairing where he judged them prostrate fell
 Before him reverent, and both confessed
 Humbly their faults, and pardon begged, with tears
 Watering the ground, and with their sighs the air
 Frequenting, sent from hearts contrite, in sign
 Of sorrow unfeigned, and humiliation meek.

(二人はただちに
 裁かれた場所に戻り、御前に畏れつつ、身を低くし、
 そこでへり下って、かれらの罪を告白し、
 赦しを乞うた。二人の涙が大地をぬらし、
 ため息が大気を満たした。いずれも
 偽りのない悲しみと柔らかな謙遜の印として
 砕けた二人の心から生じたのであった) [1098—1104]

と、失楽後始めて神に祈るのは相応しい。アダムとイブとの対話は最終的に、祈りという神との対話に結晶したのである。

V

まとめに入ろう。失楽後のアダムの独白を読むと、かれもサタンと同じように、「衷なる地獄」にあって自らで自らの魂を閉ざしていく傾向に陥りかかっていたことがわかる。だがかれはイブという他者を得ることで、その言葉の、加えて所作の、いじましさに打たれて、心を再度開かれた。アダムの精神の自家中毒を、イブという他者の存在とその存在との対話が解毒したのだ。その結果、かれはイブに対してのみならず、神に対しても魂を開くことになった。

ちなみに『樂園喪失』の語り手は第11巻の冒頭において、アダムとイブの回心は『『先行する恩恵』が下ったから ('Prevenient grace descending' [XI, 3])』と説明している。確かに神学の立場から見れば、この恩恵こそが二人の回心の決め手であろう。とはいえ約200行にわたるアダムとイブの対話を読んできた読者としては、二人の対話こそが相互の魂を開いたのでは、と考えたい。あえていえば、イブの誘惑がなければアダムの失楽はなかったのと同様、彼女からの和解と対話のイニシアチブがなければ、かれと神との和解はなかったのでは、と思われさえするのだ。それが余りに人間中心的な見方であるとすれば、神がアダムに与えた恩恵の具体的な形は、対話相手としてのイブの存在であった、とはいい得るのではないか。

「神はその憐れまんと欲する者を憐れみ、頑固なにせんと欲する者を、頑固なにし給う」とはロマ書中の言葉（9章18節）である。この小論の中で見てきた『樂園喪失』の箇所にも則して考えれば、「頑固なにせんと欲する」に下される罰が孤独および対話の欠如状態であり、「憐れまんと欲する者」

に与えられる憐れみが他者の存在とその存在との「対話」といえる。アダムがイブとの対話に応じたことは、神に対する人の側の応答の第一歩であったわけだが、そのかれに対話を成立させるための他者が与えられたことは、人への神の配慮の具体的表現だったのだ。ミルトンが『楽園喪失』全巻を通じ証さんとした「人に対する神の道」('the ways of God to men' [I, 26]) の一端は、他者との対話の実現という形で示されていた、と言っても過言ではあるまい。

注

- 『楽園喪失』原文の引用は、Alastair Fowler, ed., *Milton: Paradise Lost* (London and New York: Longman Annotated Poets, 1971. 以下ではFowlerと略記)による。ローマ数字は巻数、アラビア数字は行数を示す。訳は全て西川。聖書の引用は文語訳(日本聖書協会, 1997)による。ダンテ『神曲』からの引用は山川丙三郎訳(岩波文庫, 1952)による。
- (1) John Broadbent, *Some Graver Subject: An Essay on Paradise Lost* (London: Chatto & Windus, 1960), p. 80.
 - (2) 例えば無教会キリスト者の矢内原忠雄が、両者の間の共鳴を聞き取っている。矢内原は門下生に対して『楽園喪失』『神曲』双方について優れた講義を行ったが、その講義録は『土曜学校講義録』第5巻から第10巻までに収められている(矢内原伊作・藤田若雄編集, みすず書房, 1969-70。『神曲』の講義録は第5巻から第7巻まで、『楽園喪失』の講義録は第8巻から第10巻まで)。『楽園喪失』のこの箇所についてのコメントは第10巻, 201頁参照。
 - (3) さらにいえばlightは、ファウラーの註にある通り, 'alight' (「降りかかる」)という動詞の意に加えて 'not heavy' (「軽い」)の意の形容詞としても解せる(Fowler, p. 547, ll. 740-741の註参照)。アダムとしては「(重力の法則上の中心なのだから)原罪の呪いの力も、本来私の頭上ではゼロになるべきはずなのに」と言いたいのだろう。ここもそうだが、こういう conceit というか、「利いた口」的表現は、『楽園喪失』では否定的コンテクストの中で多く登場するようだ。拙論本文89頁, および(4), (7)を参照。
 - (4) 具体的には 'F[air patrimony/ That I must leave ye, sons' (「何と立派な財産を、お前たち子孫に残すことか」[818-819])の'fair'の中に潜んでいる自嘲。遡っていえば、同種の自己憐憫は、自分たちの子孫がかれを呪う姿を想像してアダムがつぶやく言葉('Ill fare our ancestor impure/ For this we may thank Adam'「とんでもないことを我らが汚れた始祖はしてくれたもんだ/この点でアダムに感謝でもしてやろうか」[735-736])にも聞き取れる。
 - (5) Stanley Fish, *Surprised by Sin: The Reader in Paradise Lost* (London: Macmillan, 1967. 2nd. ed., 1997), pp. 263-265.
 - (6) この言葉は原罪の本質を指すものとしてルターが用いた言葉である。松浦純『十字架と薔薇——知られざるルター』(岩波書店, 1994), 138頁参照。
 - (7) 「緊密な」という意味の形容詞 strait に「のっぴきならぬ」という含意を持たす陰險な pun は、実はアダムの独創ではない。'[L]eague with you I seek, / And mutual amity so strait, so close/ That I with you must dwell, or you with me/ Henceforth' (「そなた方と同盟し、緊密で strait な関係をもちたい。そうすれば今後私はそなた方と一緒に、というかそなた方が私と一緒に(地獄で)暮らすことになるはず」と、抱擁しあうアダムとイブを目にしながら二人の転落を画策するサタンの言葉 [IV, 375-378] が前例としてある。Fowler, p. 217, ll. 375-377の註を参照。
 - (8) Barbara Lewalski, *Paradise Lost and the Rhetoric of Literary Forms* (Princeton: Princeton UP., 1984), pp. 250-252. ちなみにブロードベントはアダムの 'me, me only' にも御子の言葉との類似を読み取っているが、本文中でも触れた通り、専ら絶望の complaint の中で発されたかれの「私」の反復の中に、犠牲的精神を認めるのは無理があると思う。Broadbent, pp. 151-152
 - (9) ルカ伝中の「罪ある女」との類似は新井、平井両氏がおのおのの訳註で指摘している。新井明訳『楽園の喪失』(大修館, 1978), 293頁。平井正穂訳『失樂園』(岩波文庫, 1981) 下巻, 382頁。
 - (10) 藤井の訳は、前述の矢内原『土曜学校講義』に収められている。引用したコメントは『土曜学校講義』第10

巻, 231頁を参照。ちなみにティリヤードもこの場面の意義を強調するが, 『楽園喪失』全篇中のクライマックスがあるとすれば(失楽の瞬間をしのいで)この和解の場面」と言い切るのは, やはり勇み足だろう。(E. M. F. Tilliard, *Studies in Paradise Lost* (London, Chatto & Windus, 1951, p. 40)「イブの嘆願が, 『楽園喪失』を絶望に終わる古典的悲劇から, 破局の中にも希望を認めるキリスト教的な悲劇へ換える転換点となった」というレワルスキーのジャンル論からの指摘の方がよりのを得ていると思う。Lewalski, p. 250.

- (11) Diane McColley, *Milton's Eve* (Urbana: U of Illinois P, 1983), p. 32.

引用文献

新井 明訳『楽園の喪失』(大修館, 1978)

Broadbent, John, *Some Graver Subject: An Essay on Paradise Lost* (London: Chatto & Windus, 1960)

Fish, Stanley, *Surprised by Sin: The Reader in Paradise Lost* (London: Macmillan, 1967. 2nd. ed., 1997)

Folwer, Alastair, ed., *Milton: Paradise Lost* (London and New York: Longman Annotated Poets, 1971)

平井正穂訳『失楽園』(上)(下)(岩波文庫, 1981)

Lewalski, Barabara, *Paradise Lost and the Rhetoric of Literary Forms* (Princeton: Princeton UP, 1984)

松浦 純『十字架と薔薇——知られざるルター』(岩波書店, 1994)

McColley, Diane, *Milton's Eve* (Urbana: U of Illinois P, 1983)

Tilliard, E.M.W., *Studies in Paradise Lost* (London, Chatto & Windus, 1951)

矢内原忠雄『土曜学校講義(十) ミルトン「楽園喪失」III』(矢内原伊作・藤田若雄編集。みすず書房, 1969)